

## MfG\_J\_Niigata\_Prefectural\_Museum\_Collection\_detail

### MfG\_J\_Niigata\_Museum\_of\_Modern\_Art\_Treasures

Formerly, MfG\_J\_Kinbi\_Rodin and Museum\_of\_Modern\_Art\_Treasures

#### 目次

##### 1. 県立近代美術館エントランス ロダンの「カリアティードとアトラント」

- (1) カリアティードとアトラント
- (2) 本作品製作のころまでの、前半生
- (3) ブリュッセルのアンスパック通りのビルの二階

##### 2. 近代絵画

- (1) コローのBiblis
- (2) モネ

##### 3. ポップアート、二十世紀後半の現代美術

(2021May\_県立近代美術館の所蔵品の常設展の物語)

- (1) 今回の代表的な展示作品 (春日の個人的選択)
  - 1) 岡本信治郎さんの「10人のインディアン」(1964)
  - 2) 海外作家の作品
  - 3) 亀倉雄策さん、七十年前の作品

##### 4. 所蔵品常設展と、かつての所蔵品

- (1) 今回の所蔵品常設展
- (2) 長岡現代美術館が所蔵していた作品の製作者について (一部です)

##### 5. 長岡現代美術館賞展の目指したもの ～ 絵画における巨匠とは

- (1) 絵画の巨匠の二つのタイプ
  - (2) 曼荼羅と現代絵画
- (参考) 長岡現代美術館の思い出 館長のあいさつ
- (参考) 長岡現代美術館2階と3階
- (参考) 岡本信治郎さんの「10人のインディアン」

今まで、ガイドからのメッセージでは、以下の文書で紹介してきました。  
和文で、「トピックス \_長岡、新潟のアートの系譜」  
(MfG\_J\_Genealogy\_of\_art\_around\_Nagaoka.pdf)

英文で、県立近代美術館、駒形十吉記念美術館の所蔵品。  
(guide\_Kinbi\_museum.pdf)  
(MfG\_Komagata\_Jukichi\_Aty\_Museum.pdf)

現代美術の所蔵品常設展と、かつての所蔵品について  
常設展で、これだけの質の高い現代美術を一举に展示できるのは、国内に  
国立近代美術館、ほか、数館に限られると、確信します。  
みなさんも、一度はご覧になっている岡本信治郎さんの「10人のインディアン」  
ですが、通常は代表的な一点だけの展示だと思います。今回は全作品、  
10点セットが揃って展示されています。もともと10点セットの展示には大きな  
スペースが必要ですから、コレクション展ならではのメリットです。  
アンディ・ウォーホルの「花(10点セット)」、ほか、ぜいたくなコレクション展です。  
しかし、もとは、もっと多かったのです。(今は全国に四散していますが。)

# 1. 県立近代美術館エントランス ロダンの「カリアティードとアトラント」

## (1) カリアティードとアトラント

オーギュストロダンは、フランスの彫刻家。

(フランス語: François-Auguste-René Rodin)

(1840年11月12日 - 1917年11月17日)

県立近代美術館のエントランスホールに、ロダンの《カリアティードとアトラント》という3本の柱それぞれに像が刻まれた巨大な彫刻作品が据えられています。

階段を上ると、上から見下ろすこともでき

ます。 カリアティードとは女性人像柱、アトラントとは男性人像柱を意味します。

近世になると、カリアティードを建物のファサードの装飾として取り入れたり、暖炉の装飾に取り入れたりする例が、見られるようになりました。



この女性人像柱を中心、男性人像柱を両側に置いた三体の像は、実際に、ベルギー、ブリュッセルのアンスパック通り(Hunspach)という目抜き通りのビルの二階に、据えられていたものです。

この作品は大理石のように見えますが、細かく碎いた石を漆喰と混ぜたものを使用したもので、技法的にも珍しいとされています。

威厳をもった大胆で力強い肉体表現には後の作品に継承、発展していく要素が含まれており、傑作《青銅時代》(1876年)と同じ時期に制作されたもので、ロダン研究の上でたいへん貴重なものとされています。

普仏戦争がなければ、彼はベルギーで大型彫刻の修行をすることではなく、後世のロダンはなかったかも知れません。

多くの若い芸術家が普仏戦争の影響で生活が苦しくなり、パリを離れ、光の環境が違う国や地域で、絵の勉強を続けます。

その普仏戦争でパリを離れた経験が、画風を大きく変えた画家も多いようです。その代表が、彫刻でロダン、絵画でモネだったかも知れません。

## (2) 本作品製作のころまでの、前半生について、Wikiから抜粋します。

1840年、パリ在住の労働者階級の子として生まれた。

1860年、パリで、ロダンは建築装飾の下彫り工として、下積みの苦労をする。

ロダンは学業継続を望んでエコール・ボザール(グラン・エコール)に入学を志願した。ロダンは同窓生をモデルにした塑像を提出したが、ボザールからの評価は不合格だった。諦めずに翌年と翌々年も塑像を提出し続けたが、ボザールからは全く相手にされなかった。当時のボザールは技術的な要求水準がさほど高くなかったとされ、数度にわたって入学を拒否されたことは非常に大きな挫折といえた。

ロダンが入学を拒絶された理由は、ボザールでの新古典主義に基いた彫刻教育と異なる嗜好で作品を作っていたことも一因かもしれない。

入校を諦めたロダンは室内装飾の職人として働きながら、次の道を模索していた。1863年、ロダンに追い討ちを掛けたのが姉マリアの死だった。姉の後を追うように修道院に入会したロダンは修道士見習いとして、美術から神学へと道を変えようとした。だがロダンの指導を任せられたピエール・ジュリアン司教は彼が修道士に不向きだと判断して、美術の道を続けるように諭した。

修道会を離れたロダンは動物彫刻の大家であったアントワーヌ＝ルイ・バリーに弟子入りして、深い影響を受けた。また24歳の時には生涯の妻となる裁縫職人のローズと知り合い、長男をもうけているほか、装飾職人としての労働も再開した。1870年、普仏戦争が勃発すると彼も徴兵対象となつたが、近視であったことから兵役を免れた。それでも戦争の影響で仕事が減って生活が苦しくなり、30歳までロダンは家族を養うだけの稼ぎをとれなかつた。職を求めて新天地に向かうことを決めたロダンは家族とベルギーへ移住して、そこで知り合いの紹介でブリュッセル証券取引所の建設作業に参加した。ロダンは当初は仕事が終われば早々に切り上げてフランスに戻るつもりだったが、様々な理由から6年間滞在を続けた。

カリアティードとアトラントは、このころの作品。

実際に、ベルギー、ブリュッセルのアンスパック通り(Hunspach)という目抜き通りのビルの二階に、据えられていた。近世になると、カリアティードを建物のファサードの装飾として取り入れたり、暖炉の装飾に取り入れたりする例が見られるようになった。内装に用いるという新たな使用法は古代にはなかつたものである。

ベルギー時代は彼の創作活動において重要な要素と考えられている。

彼は装飾職人として独学で彫刻の技法を修練していたが、展览会用の作品を作る余裕がなかつたために、誰も彼が彫刻家としての夢を抱いていたことを知らなかつた。

1875年、職人の親方との関係が悪化したこともあり、ベルギー滞在中に生活費を節約して貯蓄を続けているロダンはローズを連れて、念願のイタリア旅行に出かけていった。

そこで目の当たりにしたドナテッロとミケランジェロの彫刻に衝撃を受けたロダンは、多大な影響を受けることになつた。

彼は「アカデミズムの呪縛は、ミケランジェロの作品を見た時に消え失せた」と語っている。

ベルギーに戻ったロダンは早速イタリア旅行で得た情熱を糧に『青銅時代』を製作、十数年ぶりに彫刻家として活動を開始した。

1877年の『青銅時代』は、ロダン独自の人間の生命、情熱の造形化をはたした最初の作品である。



『青銅時代』

(3) ブリュッセルのアンスパック通りのビルの二階

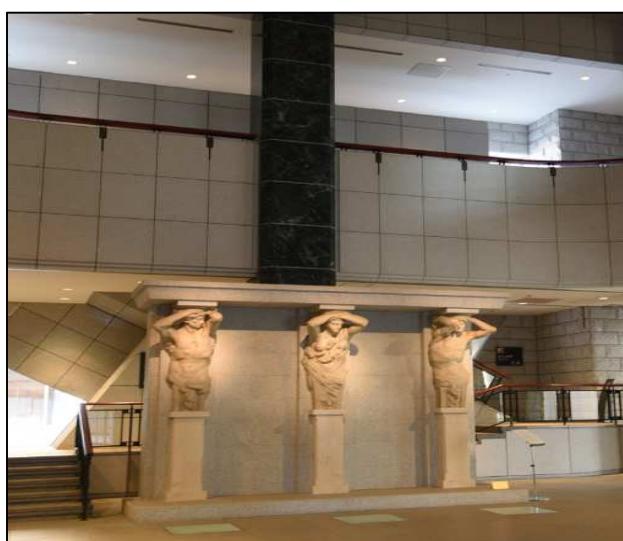
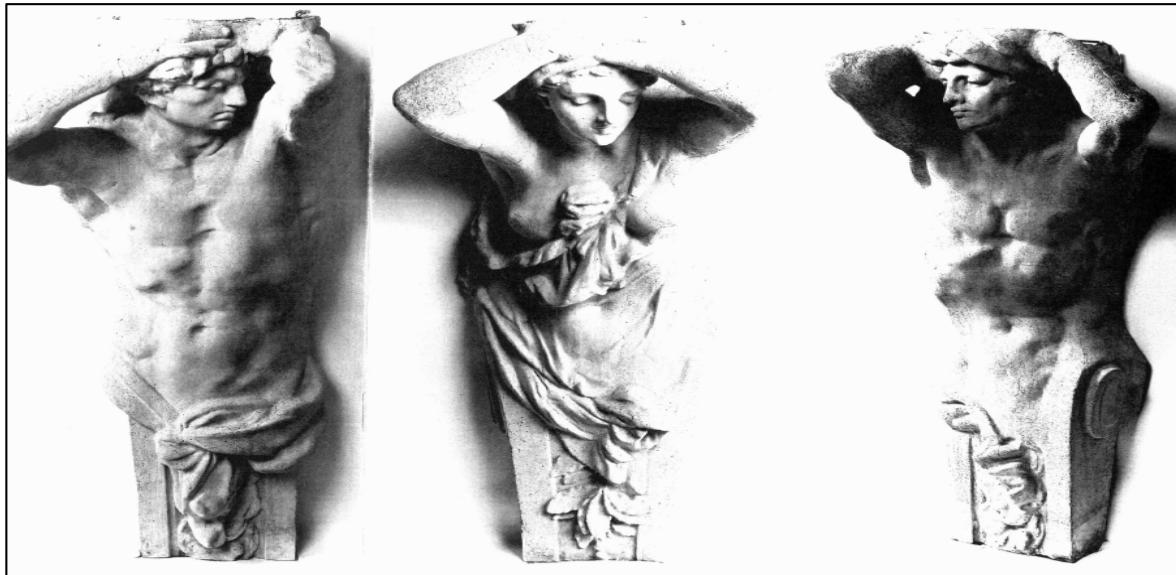
新潟県立近代美術館・ロビーの「カリアティードとアトラント」

カリアティードとは女性人像柱、アトラントとは男性人像柱。

下左の写真のように、実際に、ベルギーの首都ブリュッセルの

アンスパック通り(Hunspach)という目抜き通りのビルの二階に、

据えられていたものを、県立美術館新設の目玉として購入しました。



## 2. 近代絵画

### (1) コローのBiblis

カミュー・コロー《ビブリ》1874-75年

《ビブリ》は、画家が最晩年に情熱を傾けて描いた作品で、作成の前年、1873年10月にバレエ『泉』の舞台を観て、心を動かされたことが、この作品を構想する大きなきっかけとなったそうです。（下図の左）

絵のタイトルこそ、ギリシャ神話のビブリ(Biblis)を想起させるものですが、この作品が、どのような主題を表しているのか、明確にはまだわかつていないというのが、現段階の定説のようです。

いずれにしても、画面の左には、悲恋の結果、その涙が泉となって残っており、画面の中央から右側に描かれている人々は、その泉の場所を指さしている、ということは、間違いないようです。

Biblis (restrike Etching) By Jean-baptiste-camille Corot



近代美術館の絵



エッチング作品

画面が暗く、わかりにくいとも感じますが、幸いにも当初の絵のエッチングが現存しており（下図 右）、詳細を理解することができます。

### 3. ポップアート、二十世紀後半の現代美術 (C) 春日正利

(2021May\_県立近代美術館の所蔵品の常設展の物語)

#### (1) 今回の代表的な展示作品 (春日の個人的選択)

常設展で、これだけの質の高い現代美術を一举に展示できるのは、国内に国立近代美術館、ほか、数館に限られると思います。これらの多くは大光コレクションの遺産の所蔵作品ですが、数年に一度しか展示されない為、今回も貴重な機会でした。

##### 1) 岡本信治郎さんの「10人のインディアン」(1964)

みなさんも、一度はご覧になっている岡本信治郎さんの「10人のインディアン」ですが、通常は代表的な一点だけの展示が殆どです。今回は全作品、10点セットが揃って展示されています。もともと10点セットの展示には大きなスペースが必要ですから、コレクション展ならではのメリットです。

昭和39年の第1回長岡現代美術館賞展では、このうちの三点が出品され、大賞を受賞した。右の作品は、一人ではなく二人だそうで、正式のタイトルは「インディアンが2人 ……(「10人のインディアンより)」。



(白木谷国際現代美術館 Webページより)

「10人のインディアン」は、髪飾りをつけ長靴をはいたインディアンの姿が、太い描線で囲まれた簡潔な形体など、明るく鮮やかな色調で描かれています。10点とも、単純化されたイメージながら、そばに寄って、じっくりと見ると、すごく力強い描写であることがわかり、抽象画と具象画の両方の性質をもつ、独特の世界を示しています。多分、これも、大賞受賞理由のひとつ。

大半の作品は撮影OKなのに、この「10人のインディアン」の10点は、展示室では、撮影禁止でした。十点、皆、凄い筆遣いが見える作品ですが、会場で見たときの記憶にしか残すことができません。この筆致は、過去の図録でもわからないことで、鑑賞者にとっても、そして作家にとっても、大変、もったいないことではないかと、思うのですが。

## 2) 海外作家の作品

ロイ・リキテンシタイン

柳と睡蓮 (1992)



キース・ヘリング

花 「五点組」(1990)



アンディ・ウォーホル

花 「十点組」(1970)



マックス・エルンスト

鳥=人間 (1934-35)



3) 亀倉雄策さん、七十年前の作品  
亀倉雄策 スリーカメリヤ チューインガム(1950)



以上の作品は、コレクション展の特例で、デジカメ・フラッシュなしの撮影が許可されていました。  
学芸員さんの確認のもと、デジカメ・フラッシュなしで撮影した画像です。

## 4. 所蔵品常設展と、かつての所蔵品

© 春日正利

## (1) 所蔵品常設展

通常、常設展は、近代の所蔵名品展、新潟の画家の作品、版画・リトグラフ・写真などの作品、その他に、特定のテーマなどから三部構成で、年四回、入れ替えがあります。

そのなかで、まとまった現代絵画を一室に展示することは、稀です。

その意味からも、今回のコレクション展は、アンディ・ウォーホルの「花(10点セット)」、他、大変ぜいたくな常設展でした。

近美の現代絵画は、三つのコレクションの集合体といえます。それらは、

大光コレクションから、新潟県が購入したもの

新潟県が、独自に購入したもの

駒形十吉記念美術館からの寄託作品

このうち、駒形十吉記念美術館からの寄託作品については、「長岡現代美術館賞展」出品作品ほか、駒形さんが個人で収集した現代絵画で、大作が多いです。大半の作品は撮影OKなのに、「10人のインディアン」の10点が撮影禁止であったのは、この理由によるものと思います。

いづれにしましても、県立近代美術館も、長岡現代美術館の大光コレクションの一部が新潟県に残っていたから、「長岡に建設しよう」という話は、なかつたでしょう。

今朝白の駒形記念美術館も存在しない、アートの少ない、さみしい長岡であつたことと思います。まさに駒形十吉さんの引力だと思います。

参考に、長岡現代美術館カタログより、駒形さんの挨拶文を、5章に転載しました。

単に、現代美術の美術館を建設し、最新の世界の美術動向を睨んだ作品収集のみならず、「長岡現代美術館賞展」を主催し、公開審査をするということで、若い作家を育成・援助することも、目指していました。

これは、現代日本絵画にも云えることで、こちらは、加山又造さん、平山郁夫さんらを、大家になる以前の、若いうちから支援し、駒形記念美術館の所蔵品に結実しています。

芸術家を育てる、米百俵にも通じるような志を感じざるを得ません。

明治期、長岡商人は、中央の日本画壇の芸術家を、頒布会開催と買い上げなどで支援したそうですが、その集大成が駒形十吉さんの活動として実現したような気もします。

(2) 長岡現代美術館が所蔵していた作品の製作者について  
(一部です) (C) 春日正利

今回の現代アメリカ美術を中心とした展示だけでも凄いのですが、全国に四散する前の、かつての作品群は、もっと凄かったのです。四十年前ですが、もし全て残っていたら、今でも日本有数のはず。大変な現代美術館でした。只々、圧巻の一言です。現在、このなかの数点のみが新潟県所蔵です。

まずは、典型的な現代美術で、まさにオールスターの集団です。

Francis Bacon (1909 – 1992)

Roy Lichtenstein (1923 – 1997)

Andy Warhol (1928 – 1987)

Yves Klein (1928– 1962)

James Rosenquist (1933– 2017)

Keith Haring (1958 – 1990)

以下は、かつてにリストアップしていますが、綺羅星のごとくです。

Henri Rousseau (1844 – 1910)

Paul Cézanne (1839 – 1906)

Odilon Redon (1840 – 1916)

Maurice de Vlaminck (1876– 1958)

Wassily Kandinsky (1866–1944)

Pablo Picasso (1881– 1973)

Joan Miró (1893–1983)

Paul Klee (1881–1940)

Lucio Fontana (1899–1968)

Fernand Léger (1881–1955)

Benjamin Nicholson (1894 – 1982)

Rene Magritte (1898–1967)

Salvador Dalí (1904– 1989)

Max Ernst (1891– 1976)

Andrew Wyeth (1917–2007)

高値になる前、卓越した眼力で選んできたのでしょう。よく収集しました。

協力した村越画廊の力も、あったと云われています。

※ クロード・モネ、アンリ・マチスの作品は、大光コレクションとは別で、新潟県購入と思います。

## 5. 長岡現代美術館賞展の目指したもの ～ 絵画における巨匠とは

### (1) 絵画の巨匠の二つのタイプ

いろいろな専門分野のうち、特に芸術領域で、巨匠とは、傑出した人物のこととされています。絵画、芸術における巨匠には、二つのタイプがあるようxに感じます。

新たな道を切り開いた芸術家 ～ 単発に終わっても、創造した功績  
その道を体系化した芸術家 ～ 後続に、道を見るように示した功績

長岡現代美術館賞展の公開審査は、必ずしも若い芸術家だけでなく、中堅の芸術家も含め、この両方を対象に、見出していく方向ではなかったかと、感じます。

### (2) 曼荼羅と現代絵画

第一回長岡現代美術館賞展の大賞候補に残った、森本紀久子さん(1940年生まれ)の作品は、曼荼羅を想起させる絵画。現在、最も人気のある画家の一人である草間彌生さん(1929年生まれ)の絵の雰囲気に似ています。

森本さんの作品は、このころから、画面一杯に細密描写を繰り広げる、曼荼羅のような絵画を描いています。

森本さんの候補作品は、岡本信治郎さんの作品の

「10人のインディアン」とともに、

今も時々展示されるが、いつも会場で、ひとめで分かる、新鮮な感動である。



(森本さんの曼荼羅的な作風の絵)

曼荼羅の画家と云えば、前田常作さん(1926 – 2007)がいる。

前田さんは、第二回長岡現代美術館賞展の大賞候補に残り、駒形さんも強く推したという。その後も、前田さんの作品を多数購入し、抽象絵画の大作が、長岡現代美術館二階の会議室前のソファーセットの後ろの壁を飾っていた。前田さんの絵には、ひとつの図象というか、法則に則ったものになっている。

長岡現代美術館賞展の審査では、表現方法を含め、思想的なものを有する作品を、評価したいという姿勢があつたように感じています。

(参考) 長岡現代美術館の思い出 館長のあいさつ

館長の挨拶 (長岡現代美術館所蔵品カタログ より)

### 長岡現代美術館

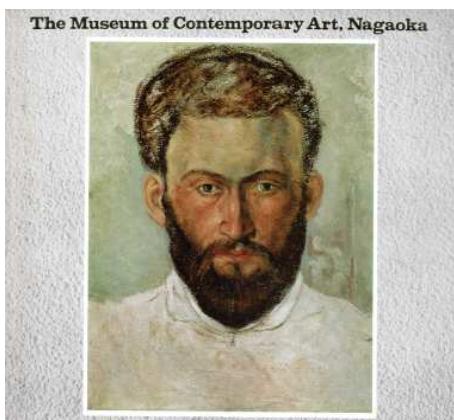
日本民族は、鋭敏なそして豊かな感覚と、洗練された技術で、世界に冠絶した伝統ある美術文化を、つくりあげました。明治に入って、新しく西欧から洋画が伝えられ、それまで日本になかったリアリズムの世界を展開しますが、今までの一世紀にも満たない間に、世界のレベルに達して、その重要な役割を果すに至っております。

長岡現代美術館は、この日本の現代美術が、今日の世界美術の中において、どのように位置しておるかを、各国の美術と比較しながら示すと共に、近代において、それが如何に展開して来たかを、明らかにしようとするものであります。このような美術館は我が国においても数少ないものとして重要な意義をもつものと思います。

長岡現代美術館は、現代美術の推進に積極的に寄与することを念願し、この意図に沿った一つの事業として1964年の開館以来「長岡現代美術館賞」を設定して、現代美術に新風を送りこみ、更に広く国際的にも活躍し得る能力を持つと思われる内外の作家を顕彰し、同時に明日のヴィジョンの開発の原動力となることを期するものであります。

私は今後益々より一層美術館の充実を図り、教育と文化の振興に寄与すると共に、国際的にも貢献したいと深く念願している次第であります。

館長 駒形十吉



長岡現代美術館  
所蔵品カタログ 表紙

(Printed on October 1, 1968 )

(参考) 長岡現代美術館2階と3階

「1964(昭和39)年8月1日、現在の長岡市坂之上町の地に開館。「現代美術」を名乗った世界初の美術館である。公開審査を行なう長岡現代美術館賞を設け、1968年まで5回にわたり実施している。同賞には、出品作のうち1作家1点を購入するという画期的なシステムがあった。現在長岡商工会議所となっているビル(旧長岡文化会館)の1階が当美術館にあたり、1983年まで開館していた。美術館部分は現在も美術文化ホールとして残しながら、ごくまれに展覧会を開催している。それ以外にも、ビルの外壁装飾レリーフ(斎藤義重作《大智淨光》1964)が、その名残となっている。」

前庭の設計も斎藤義重作である。

つまり、世界初の「現代美術館」が長岡で誕生していたのです。

斎藤 義重(さいとう よししげ、1904年5月4日～2001年6月13日)

青森県弘前市出身の現代美術家。多摩美術大学教授。

二科会の九室会や美術文化協会の創立メンバーであり、日本の戦後美術の偉大な前衛作家として知られています。

親しみをこめて「さいとう ぎじゅう」と読まれることもある。絵画と彫刻の垣根を超えた表現を追求して作品を制作した。戦後以降の現代美術を代表する作品の数々を残し、「もの派」の作家らに大きな影響を与えた。

長岡現代美術館の壁面レリーフと前庭の製作。



右から大、智、淨、光

開入本願大智海〈かいにゅうほんがんだいちかい〉

清淨光と申すは、法藏菩薩、貪欲のこころなくして得たまへるひかりなり。

## 開館

太平洋戦争終戦後の1950年、新潟市出身の山本孝は日本最初期の現代美術専門の「東京画廊」を東京・銀座に開業した。大光相互銀行(現・大光銀行)社長で当地在住の実業家駒形十吉は東京画廊が開業して以来の顧客であり、東京画廊は駒形の財力で成長し、駒形のコレクションは山本氏の目利きで成長した。

駒形が集めた近現代美術作品を基にして、1964年8月2日に駒形を館長とする私設美術館として長岡現代美術館が開館。開館披露には美術評論家の針生一郎や今泉篤男、画家の岡本太郎、前田常作、元永定正らが国鉄上野駅発の急行「佐渡」号で駆けつけた。

1979年に閉館。

長岡現代美術館は日本で初めて館名に「現代美術」を用いた美術館であり、大光相互銀行が建設した文化会館が施設に使用された。

公立の新潟県立近代美術館が開館するのは約30年後の1993年、同じく公立の新潟県立万代島美術館が開館するのは約40年後の2003年であり、長岡現代美術館は新潟県初の本格的な美術館だった。開館時には日本を代表する現代美術家斎藤義重のレリーフ「大智淨光」が建物の正面右側に設置され、2階ロビーには前田常作の壁画が設置された。

開館時の1階展示室常設展示作品は33点であり、パブロ・ピカソ、フェルナン・レジェ、

ワシリイ・カンディンスキー、ヴォルス、フリーデンスライヒ・フンデルトヴァッサー、

ジュゼッペ・カポグロッシ(英語版)、タジリシンキチ、岡本太郎、

前田常作、元永定正、川端実、高間惣七、桂ユキ子、オノサト・トシノブ、白髪一雄、

田中田鶴子などの作品であった。

3階展示室には近代洋画が集められ、

浅井忠、青木繁、岸田劉生、萬鉄五郎、前田寛治、佐伯祐三、小出檣重、

梅原龍三郎、安井曾太郎、鳥海青児、海老原喜之助、脇田和、糸園和三郎、横山操、

加山又造などの作品が開館時に陳列された。～この部分を、新潟県が購入したことになるか

(参考) 岡本信治郎さんの「10人のインディアン」

岡本信治郎(おかもとしんじろう)は昭和8年、東京生まれ。昭和27年、都立日本橋高等学校を卒業後、印刷会社のアート・ディレクターとして26年間勤務。独学で水彩画をはじめ、日本水彩画展、二紀展などに出品。昭和31年、村松画廊で最初の個展を開き、同年ヨシダ・ヨシエらと「制作会議」を結成、新印象派の画家スーラの作品に出会いことで、現代の病理を明るい色彩と単純な形態によって表わす発想を得る。

昭和31年から読売アンデパンダン展に出品、昭和37年と翌年のシェル美術賞展で佳作賞を、昭和39年第1回長岡現代美術館賞展で大賞を受賞。この間、「聖家族」「10人のインディアン」など、ユーモラスな形態の内に空虚感を込



めた連作を発表し、現代日本の  
ポップ・アートを代表する一人と  
なった。

